

2013年洛北ブロック聖体大会

溝部司教 講話

皆さんこんにちは。今日はたくさん話すよりは、聖体に関する聖書の箇所を読んで、初代教会から聖体についてどう考えたのかというのを皆さんと分かち合いたいと思います。皆さん聖書を持ってきていないと思うので、読みながらやらせてください。

聖書の中にイエス様の最後の晩餐と聖体の制定ということがありますけれども、聖書が書かれた時代はむしろ後の時代になりますので、最初の頃から一緒にお話ししていければと思います。

最初に使徒言行録の2章42節から読んでみます。エルサレムの教会ではこういう風にしていたということです。イエス様が亡くなって、エルサレムの教会というのが最初の母なる教会です。そこで晩餐式とご聖体というのを大事にして教会のお祈り、礼拝、典礼が行われます。《さて彼らは、》—彼らというのは信者たちですね、最初の信者です— 《ひたすら使徒たちの教えを守り、》—イエス様が弟子たちに伝えたことと、弟子たちが信者に伝えたこと、これを伝承と呼びます。聖伝といってもいいです。カトリック教会の教えは、いつもイエス様が弟子たちに伝えた、その弟子たちがまた次の後継者に伝えた教えを大事にしてきた、ということです。— 《兄弟的交わり、》—教会は兄弟の交わりです— 《パンを裂くこと、祈りに専念していた》。

最初の時代からエルサレムの時から、パンを裂く式というのが礼拝であったということ、それを私たちにわからせてくれております。最初はユダヤの過越しの祭りの形式をとったでしょう。徐々に徐々にキリスト教の典礼が生まれてきます。その典礼の真ん中は、一緒にパンを裂くこと、一緒にパンをいただくこと、一緒に杯から御血をいただく、これが最初から行われておりました。これはイエス様の教えだった、弟子たちに伝えられて、弟子たちがまた教会に伝えた事柄です。

初代教会からパンを裂く式、ミサ聖祭というのは一番大事だった。祭壇を囲む共同体、兄弟の交わり、これがカトリック教会ということです。カトリック教会でない他の教会、兄弟ではあるんですけど、彼らは「言葉を囲む共同体」なんです。イエス様の言葉、聖書を囲む共同体、彼らはこれが「教会」、「言葉を中心とした教会」という風に考えています。カトリック教会は「祭壇を囲む兄弟の教会」、私たちのカトリック教会にとって、祭壇を囲む、ミサ聖祭、これは命と考えてもいいです。

これが最初の時代ですけど、50年代、イエス様が亡くなって20年くらい経とうとするときに、少しずつご聖体に対して、ミサ聖祭に対して緩みが生じてきたり、あるいは疑いが生じてきます。だんだんイエス様の時代から離れてくるわけですね。「聖体はキリストの体、パンはキリストの体」—ちょっと信じられないなあという人が出てきます。その頃

は食事と聖体、ミサが一緒になっていたのです、酒を飲み過ぎてミサ聖祭ができなかったり、こういう緩みも出てくる。あまり準備しないでご聖体、イエス様の体を受けるという不埒な信者が出てくる。こういうことに対して、パウロはコリントの教会に手紙を書きました。

「私が今から言うのは、イエス様が弟子たちに言ったこと、弟子たちがその弟子たちに言って、エルサレムの教会がしっかり守っていること、そして全ての教会が守らないといけないことは、伝えられたこの教えだ」といって、コリントの教会に手紙を送っております。というのはコリントの教会でミサ聖祭の前に飲み食いしたり、ミサ聖祭の中で余計なことを言ったり、という乱れが生じている。それからキリストの体というのが、パンがイエス様の体と信じられないというような、こういう人が現れてきている。それに対してパウロは「私はあなたがたに言います。これを守ってください。これが教会で一番大事な典礼です」と仰っています。こんな風に言うんですね。これが今のミサの原型になっております。《あなた方に伝えるのは実に私が主から受けたことなのです》—これはイエス様が言ったこと、絶対に守って欲しいことと言うんです。《すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげ、それを裂いて割って、こう仰せになりました。『これは私の体、あなた方のためのものです。』》　パウロは言うんです。ここにパンがあるよ、と。このパンを取って、イエス様は感謝の祈りをささげて、それを裂きました、割りました。「裂く」というのは人々のために自分を渡すという意味です。それからパウロは言います。「このパンが裂かれるとき、割れるとき、割るときに、イエス様が十字架で私のために死んでくださった、ということを表しているんですよ」と。裂いて、そしてそれを渡して、みんなで食べる。『これは私の体』—私の体だって？　イエス様の体じゃないんじゃないか、おかしいんじゃないかっていう人たちがいつの時代もいました。

16世紀にプロテスタントの改革があります。マルティン・ルターとか、ジャン・カルヴァンという人たちが出てきます。彼らが一番最初に疑ったのはこういうことですね。司祭が「これは私の体である」というときに、パンがキリスト様の体になるというのをまず疑ったんです。おかしいんじゃないかと。マルティン・ルターは、信じる人々がみんなでキリストの体だって言ったらそのときに体になって、信じる人はそれを頂いたら力が与えられる。信じていない人にとってこれはパンに過ぎない、体じゃない、と。カトリック教会はいつもそうじゃないんですよ、キリストの体といたら体なんです。信じていない人の場合も体なんです。それからご聖体を聖櫃に残す、そこにはキリスト様の体がある。ここに信者でない人がいても、これは体なんです、というのがカトリックの教えになります。

もう一つ、「私の体」と言っているのは司祭なんです。キリストと司祭が一緒になっているんです。私が司祭として「体」といったらキリストの体になっている。おかしいなあ、信じられないなあという人がいつの時代もいたわけですね。

私の兄は日本キリスト教団の牧師です。年に4回、晩餐の式をします。彼らは秘跡によ

る司祭はいないんです。牧師になるのは試験と認定を受けて牧師になるんです。カトリック教会ではイエス様がペトロや弟子たちに按手して司祭にしました。ペトロやその弟子たちは次の人に按手して司祭にしました。私はペトロの後継者による司教によって按手して司祭になりました。私は司教として次の司祭たちに按手して司祭にします。秘跡的な祭司職というのがあります。私の兄の教会ではそれがありません。一般的な信徒の祭司職だけしかありません。みんな司祭なんです。確かにみんな司祭なんですけど、私たちはみんな司祭だけど、秘跡による司祭が必要だといっております。彼らはみんな司祭ですから、年に4回晩餐の式を記念として行いなさいということをするんです。私はその場において、でもしませんでした。そしたらそのパンはキリストの体でなくて。彼らはみんな信徒の祭司職ですので、あずかっている信者さんたちみんなが手を伸ばします。そうして「これは私の体。あなたがたのために渡される私の体である」とみんなで言います。そしたらそこはキリストの体になります。信じて欲している人にはキリストの体になる、私の兄が説明したのはこういう説明でした。

カトリック教会はそういうふうには考えません。秘跡による司祭がいて、その司祭が按手して「これは私の体」といったときに体になる。違いが出てきますかね。プロテスタントの教会では司祭は要らないんです。信徒で十分できますし、信徒で体もそうやってできるわけですね。

カトリック教会は、どうしても司祭が必要になります。秘跡をうけた司祭。京都教区で司祭がいなくて一所懸命お祈りしています。なぜお祈りするんですかね。それはこのミサ聖祭はカトリック教会の命だからです。これなしにカトリック教会はないからです。どうしてもそのために司祭が必要である。ここで2つのことがいえると思いますね。私たちは司祭を作り出すほどの熱心な共同体を持たなければカトリック教会は消えていくということです。これは大きな問題ですね。それから司祭はなんでもする人ではなくて、司祭にとって一番大事なことは秘跡なんだと。ミサ、ゆるしの秘跡です。今までは神父さんになんでもやってもらって、神父さんは万能みたいな。そんなこと要らないんです。司祭の働きは少なくともいい、でもきちんとミサをしていく、こういう司祭であれば十分だといえると思います。

《私の記念としてこのように行いなさい》 記念—アナムネシス。時間と空間を超えて、私がミサにあずかるたびごとにそこにイエス様がいます。そのイエス様を中心として礼拝がささげられます。司祭が按手するとき聖霊がくだるわけです。聖霊でいっぱいになります。だてに按手してないんです。司祭というのはこれを通して聖霊がくだる、私たちの信仰です。聖霊でいっぱい満たされて司祭がキリストになって「私の体」といったときに、そこには大いなる秘跡、キリストの体、ご聖体が生まれる、といえます。

《さらに、食事が終わってから主は杯についても同じようにして仰せになりました》 40年代、50年代はパンを分かち合う最初の式、それから食事があってそれから杯を分か

ち合う式があったと、食事と一緒に食卓を囲む、これが教会だったわけです。

兄弟の交わりがあり、そこではイエス様の体を一緒にいただいて食事をしてから杯を満たす、血を渡す。これはあなたがたのために流される私の血なんだ、こうして杯をいただいたということがわかります。

50年代にこういうことがあって、60年代の終わり頃にマルコという人が福音書を書いておられます。一番古い福音書がマルコになるわけですね。マルコは何を言っているんでしょう。コリントの教会のパウロの手紙とそう変わりません。ほとんど変わっていない。一番最初にこういう典礼が生まれてきて、それをずっと伝えてきてその典礼の言葉を聖書におこしたんです。最初から聖書の言葉があってミサ聖祭の典礼があったんじゃないで、私たちが唱えているこの典礼の言葉が最初にあって、それが福音書に書かれた、残されたと考えてもいい。だから私たちがあずかっているミサというのは、イエス様の時代にさかのぼる一番古いものだということ。だからミサの言葉を大事にしないといけないなあって思いますね。こんなふうに言っています。《さて一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美をささげ、これを裂き、弟子たちに与えて仰せになった。取りなさい。》次の時代は《取って食べなさい》というんですけれども。《これは私の体である》疑えないような気がするんですね。これは私の体である、というのをこれは象徴的な意味だ、言葉の意味だ、パンというのは神様の言葉なんだ、これを食べるときに神様の言葉がよくわかるんだとか、という意味じゃない。これはパンなんだ、食べると。パンであるがイエス様の体なんだと。率直にこういう信仰を持っているわけですね。

《また杯を取り感謝をささげて、》すなわち60年代になると、食事とミサ聖祭は分かれていくわけです。食事を一緒にするといろんな問題が起きてきて食事は別で、パンとぶどう酒だけをもとにした礼拝をささげるようになってきております。《感謝をささげ、彼らは皆その杯から飲んだ。イエスは仰せになりました「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」》ここで「あなたがた」の代わりに「多くの人」、すなわちユダヤ人だけでなく全ての人のためにささげられるパンでありますよ、という意味がここに込められている。みんなのためなんだと。

マルコはパンの増加の奇跡を2回も載せているんですよ。マルコだけ2回なんです。他の福音書は1回。ヨハネは最後の晩餐の式はないです。ただヨハネ福音書の6章で長くパンの増加の話をして、その増加の中で「これは私の体である」と何回も言います。マルコは6章と8章にパンの増加を述べてあります。なんで2回も載せたんでしょうか。

1回目、6章にこういうふうにあります。35節からですね。《さて船を下りると、イエスは大勢の群集をご覧になり、牧者のいない羊のようだとその有様を憐れみ》だから、パンの奇跡は牧者のない羊—これはイザヤの予言書にありますね—ユダヤの民はアッシリアから攻められて、みんなそれぞれが一つの方向がわからなくなって、ばらばらに走っていった、そしてまとまりがなくなってしまった。イエス様はばらばらになって、そして勝

手に自分たちで走ってる、そのユダヤ人たちをかわいそうに憐れんだ。だからマルコは最初に言うんです。パンの増加、イエスの体、ミサ聖祭は信者を一つにするもの、ということ。ミサはばらばらになった信者を一つにしていく力だと。イエス様をいただくことによって教会は一致するということが最初のパンの増加のところで話しております。

ここに教えがあると思います。自分のグループを作って、自分のグループだけでミサをして、そしてミサをいっぱい増やせばいいというわけじゃないんです。ミサは一つなんです。そのミサと一緒にあずかることを通しながら、共同体を作るんです。まあ、仕方がない理由で人数が多いからたくさんミサが出てくるでしょう。でも基本は同じなんです。ミサを通して「教会の一致」があります。だから典礼が大事、典礼は一つなんです。勝手に典礼をどんどん変えていきますと、「教会の一致」というのが崩される。典礼の全体の責任者は司教団です。司教を通して典礼の一つの一致、典礼の一致を通して「教会の一致」ということを目指します。私たちは典礼に対して敏感なセンシビリティ、感性を持たないといけません。単なる歌謡曲を歌うようなミサではないんです。神への賛美に生きる、そしてみんなの心を高揚させる、という典礼を大事にしていけないといけません。グループを作って、そのグループのためにミサをささげて、そのグループを高揚させることも大事でしょう。でもそれが教会を分裂させてはいけません。バチカン公会議は「教会の一致」ということをとても強調しています。我々ができる限り、本当に一つの信仰、一つのパン、一つの秘跡によって一緒になっていけるか、ということを考えております。

8章にもう1回パンの増加の物語があります。余ったパンというのが7カゴ。前の6章では12のカゴがいっぱいになっていますね。ばらばらになっていくユダヤ人たちにばらばらになっていく教会をまとめて一緒にパンをいただくことによって教会は一つになり、豊かになると。お恵みでいっぱいにあふれると。それが6章なんです。

8章はそれが7つのカゴにいっぱいになると。いろいろなところから来ている人たちが出てきます。すなわちユダヤ人でない人たちのためにパンが与えられて、これは教会の発展、7つのカゴ、世界に広がっていく教会の力となりますという話になります。すなわち、パン、ミサ聖祭を中心としていくカトリック教会は整数倍にもなっていくって、大きな恵みをすべての人に与え続けるんだということですね。

今年は信仰年といっています。今年は「宣教の年」ということをシノドスが出しております。教会が言うんです、新しい福音宣教の基本は、あなたが神の言葉と神の秘跡、これによって立ち上がってないといけない。上っ面で人々に信者になって教会に来いなんていったってダメですよ。あなたが信念をもって、キリストの体をいただいて、そして人々の前に行って従っている、そういう姿が福音宣教なんですよということをやっております。こうして60年代にもずっとこう聖体の聖典が続けられます。

10年経ちまして、70年代になりますと、母なるエルサレムの教会がなくなり、滅亡してしまいます。エルサレムは壊滅する、神殿も壊される、最初の私たちにとって一番大

事なエルサレムの教会がなくなります。ばらばらになってしまう。そういう中で世界にちらばって行く信者たち、彼らは何を大事にしたかって言ったら、教会を大事にした。教会の中で一緒に集まってパンを裂き、イエス様の体をいただき、御血を飲んで、最後の晩餐でしたことをみんなで思い出しながら、人々のために生きる、ということをしていった。これが70年代ですね。

70年代になりますと、イエス様が亡くなって30年から40年が経ちます。だんだんイエス様を知らない若い世代が増えてきたときに、また同じような問題が出てきたわけですね。パンはパン、体になるのだろうか？とか、あのろくでもない神父が、「これは私の体である」と言ったらイエス様の体になる？—おかしいんじゃないか。これは大きな問題になってきます。2世紀、3世紀、キリスト教を捨てた信徒が、神父が「キリストの体」と言ったらキリストの体になる？信じられない、そんなことはない、と。大罪を犯した司祭が「キリストの体」？ならない、という人たちが出てきますね。かなり有名な司教たちが出てきます。あまり有名でない教皇たちは頑として守ります。たとえ司祭が罪を犯していてもたとえ司祭に欠点が多くても、この司祭が「キリストの体」といったときには、この人の個性とは別にキリストの体になるんだと、いう教えをずっと保ったんです。今でもカトリック教会はそれを保っております。多くの信者はそれを信じなかった、ということが事実でしたようです。

私たちの400年前のキリシタン時代の一つの問題はこれでした。有名な人たちは司祭につまづいて教会から離れて行って、ある人はちゃんと本にも出したんですね。司祭が聖人でなければ、パンはキリストの体にならない、というとらえ方をしました。カトリック教会はいつもそういうとらえ方はしませんでした。同じようにキリストの体といったら体になる、ということに対する疑いがたくさん出てきます。こうして70年代に書かれた福音書—マタイとルカ—この福音書の中にもう1回、初代教会から伝わった、そしてパウロを通して伝えられた、マルコを通して伝えられた最後の晩餐のあの言葉を、もう一度自分の福音書に載せたんです。だからマタイとルカの福音書にそれが付加され書かれて残されております。ちょっとした違いがありますが、ほとんど同じです。すなわち忠実に、ずっと教会が伝えたこと。

時間がないのでヨハネにいきます。ヨハネが福音書を書いたのが90年代です。90年代といったらイエス様がなくなってもう50～60年。イエス様に会った人はもう生きていない。最後に弟子たちのうち1人だけ生きたヨハネが、自分が会ったイエスについて説明をしながら詳しく書いた、これがヨハネの福音書です。そのヨハネの6章にパンの増加の意味を長く説明していきます。長く説明していく中で、何回も「これは天から下ってきたパン、私の体である」と、繰り返し繰り返しいったということを添えております。少し読んでみましょう。ヨハネ6章34節《主よそのパンをいつも私たちに与えてください。》天から下ってきたパンなんだと話をしている。そうしたら聞いている人たちは、その天か

らのパンを頂戴と言った、と。イエスは彼らに仰せになった。「私が命のパンである」と。「私が」と話をします。それからずっと私のことが話されております。またイエス様と言うんですね。「私が天から下ってきたパンである」と繰り返す。他の人は「天からくだってきたパンで、どういう意味なんですか」と質問するんですね。言います。《私は命のパンである。あなたがたの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んだ。しかしこれは天から下ってきたパンであり、これを食べるものは死ぬことがない。私は天から下ってきた生きるパンである。このパンを食べる人は永遠に生きる。しかも私が与えるパンはこのように命を与えるための私の肉である》もう疑いないですね、「私の肉」って言ったんです。「このパンは私の肉、私の体」と。

私の兄にこの箇所どう思うんですかと聞いたら、これは象徴だ、シンボルだと言ったんです。私はどう見てもシンボルじゃなくて「命」「パン」「肉」と言っている、素直に読んだらそうしか読めないんじゃないか。そしたらユダヤ人はそれを聞いて何を言ったんでしょうか。《この人はどうして自分の肉を私たちに与えて食べさせることができようか》聞いていたユダヤ人たちも肉と思ったんですよ。「あれ私はあなたの肉を食べるんですか？あなたを食べる人食い人種になれって言うんですか？」といったんです。互いに議論し始めた。おかしいじゃないか、あなたの肉を食べるとは、と。でもイエスは「そうなんだよ」と。《人の子の肉を食べ、その血を飲まなければあなたがたのうちに命はない》。議論していると「肉なんだ、血なんだ、食べなさい、飲みなさい」。《私の肉を食べ私の血を飲む人は永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる》まだ続きます。《私の肉はまことの食べ物。わたしの血はまことの飲み物だからである》しつこいです、ものすごいしつこい。ヨハネが思うに、すなわち90年代の信者たちでおかしいと言っていた人たちに対してヨハネは、「違うよ、イエス様はこれを言った」と何回も繰り返すわけですよ。《私の肉はまことの食べ物。私の血はまことの飲み物。私の肉を食べ私の血を飲むものは私のうちにとどまり、私もその人のうちにとどまる》。

最後にイエス様は《あなたがたの中に信じない者がいる》と64節で言うんですね。《このことが弟子の多くはイエスに背を向けさせたり、もはやイエスと行動をとともにしなかった。》教会に来たけど、ミサをみてあれはおかしいといった人たちはみんな去って行った。そこでイエスは弟子12人に「まさかあなたがたまで離れていくつもりではないでしょうね」ペトロが《主よ、私は誰のところに行きましょう。あなたは永遠の命。言葉をもっておられます》と、今聖体拝領の中でいう言葉がここで言われるわけです。すなわち彼は「あなたは私に与えられたパン、あなたの体、あなたの血をいただくことによって私は永遠の命を得ます」という信仰告白です。ヨハネはこう語っている。ミサ聖祭とかキリストの体ということは、いつも教会を分裂させた大きな原因であった。信じなかった人たちはこれを通して教会を離れていった。逆にこれを信じる人たちは、教会を一致させていった。

16世紀のプロテスタントの改革のときに、まず最初にあがったのは、ミサは要らなかった、言葉だけで十分だと。こうしてトリエントの公会議ではミサが教会の命であり、一

番大事であると、長々と会議で決めていったわけです。第一バチカン公会議が途中で終わってしまいました。第二バチカン公会議での最初のテーマは、典礼は信者の生活の泉である、頂点である、すなわち私たちにとってミサ聖祭、キリストの体はカトリック教会の命であり、頂点であり、もっとも大事にするもの、これこそ教会を一つに結びつける力だと。

最後に言いたいことがあります。ミサを大事にしてほしいと思います。義務だから来るんじゃないで、ミサを通して命を得るためですよね。こういう視点から考えてミサにあずかって欲しい。説教でも言いましたけど、ミサに入る前にお聖堂に入る前に、今日は誰のためにミサをささげるか、考えてみて入ってください。あなたの夫が信者でないと信仰をもっていたきたいなと思ったら、ミサに入る前にささげてみてください。あなたがささげるお金をそのために入れたらいい。毎年一回、亡くなった自分の親がいる、どうぞ亡くなった日にはミサをお願いしてみてください。自分たちがミサにあずかったときに家族を結びつけるのはこういうことじゃないですかね。お願いして、主に自分の愛する人のために祈る、一致させる力をもっていると考えてもいいんじゃないでしょうか。

ご聖体を受けるとき、「キリストの体」「アーメン」と答えるでしょう？「信じます」「はい」「私は信じます」。イエス様をいただくことによって私の中にイエス様が入り、私の中から変えていってくださる、と信じます。隣の中に入っているイエス様と私の中に入っているイエス様は一つになっている。私たちは信仰によって結ばれた真の兄弟であると信じます。ミサが終わって出ていきます。「行きなさい、平和のうちに」行くんですよ。キリストをいただいたあなたは新しい自分に生まれ変わってミサから出ていくんです。出ていくときにもう違った自分が、こんにちは、おはよう言っている自分が。まあこれくらいの信仰をもってミサに出てきて、ミサから去って行ってくださったら、素晴らしい教会が生まれるんじゃないかなあって心から思っております。

(2013年9月23日 北白川教会にて)